



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2801号 2016.1.1 発行

平成 28 年 1 月 1 日のスタートは、縁起よく 2801 号から。毎年恒例の注目の元日社説とコラムからどうぞ。本年もよろしく願いいたします。【kobi】

社説：2016年を考える 民主主義 多様なほど強くなれる

毎日新聞 2016年1月1日

18歳と19歳の若者が、今夏の参院選から初めて投票権を持つ。政治の新たな幕開けにあたり、民主主義とは何かを考えてみたい。

去年は、日本の民主主義の成熟度が試された年だった。象徴的なのが安全保障関連法をめぐる論議だ。国民の多くが「議論は尽くされていない」と感じていたが、安倍政権は選挙ですでに国民の信任を得ているとして、採決を強行した。

民主主義とは選挙か、多数決か、少数派の尊重か、デモか。共通の答えを見いだせず、社会の分断は深まったまま、年が明けた。

社会の分断をどう防ぐ

社会の分断をどう防ぐかは、グローバルな課題でもある。

欧州では、難民の大量流入で、多文化主義が揺さぶられている。パリの同時多発テロが宗教間の憎悪をあおり、異なる価値観を否定する空気が各国で強まっている。

去年のクリスマス、英国国教会の最高位聖職者であるウェルビー・カンタベリー大主教は、過激主義者を「違いを憎む者たち」と呼び、多様性への不寛容さが欧州全体に広がることに警鐘を鳴らした。

米国では、大統領選の共和党候補指名を争う実業家トランプ氏の極端に排外的な言動が世論を扇動し、社会に亀裂を生んでいる。

ポスト冷戦後の21世紀の世界は、「モデルなき世界」である。欧州も米国も日本も、分断から融和への努力を怠れば、民主主義が漂流し、社会は危機に見舞われる。

安全保障、原発、沖縄の基地、家族や地域共同体のかたちなど、私たちが直面しているのは国の行方を左右する、困難な問題ばかりだ。経済成長が矛盾を隠した過去の時代に、解決の手がかりはない。

選択と決定の連続を、社会全体でどう乗り越えるか。それがこの先、問われているのである。

全員が納得する決定はない。であるなら、可能な限り多くの人を受け入れ、不満を持つ人を減らす政策決定のあり方を模索しなければ、社会の安定は維持できない。

だからこそ、選挙で多数を得た側の力は、相手を論破するためではなく、異論との間に接点を探るため使われるべきである。批判や反対にも十二分な検討が加えられた、と少数派が実感して初めて、決定は社会に深く根を下ろすからだ。

国の未来に多様な選択肢が提示され、公平・公正な意見集約が行われる社会。その結果としての政策決定に、幅広いコンセンサスが存在する社会。それが民主主義が機能する強い社会と呼べるものだ。

100年前の日本に、大正デモクラシーと呼ばれる時代があった。国民が政治の表舞台

に登場し、本格的な政党政治が始まった。

だが昭和に入ると、国際情勢の見誤りや経済政策の失敗もあり、民主主義は急速に衰退する。国民が自由に意見を言える社会ではなく、異論を認めない不寛容な社会になった。政党から闊達（かつたつ）な議論が消え、日本は国策と針路を間違えた。

社会が多様性を失えば、国が減びることもあるのである。

二つの潮流の分かれ目

日本の社会は今、二つの大きな潮流の岐路に立っている。

一つ目は、政治でも経済でも、国が目標を掲げて国民を引っ張る、国家主導型の社会である。

そうしたリーダーシップには、決断の正しさへの信念はあっても、国民への説明責任の意識は希薄になりやすい。国民が理解しなくても、歴史が評価してくれる、という独善に陥りがちな懸念がある。

もう一つは、一人一人が自分で情報を集め、考え、発言し、決定に参加する社会を目指す流れである。それは、自律した個人の多様な声が反映される社会のことだ。

民主主義を鍛え直すには、国民が決定の主役となる、後者の道を選びとるべきだろう。若者の政治参加もそのために生かしたい。

メディアも、公平・公正な報道で民主主義の一翼を担う。

民主主義に公平さ、公正さが欠かせないのは、政治的決定を社会に浸透させ、国論の分断を防ぎ、社会の融和を図るためである。

従ってそれは、多数決ではなく、少数意見の側がその選択の過程に納得しているかどうかで測られる、とも言えよう。メディアの公平さ、公正さも、異論や批判を多様に吸い上げることで確保される。

民主主義は、それ自体が目的ではなく、誰もが住みよい社会をつくりあげる手段に過ぎない。

20世紀前半に多くの作品を残した英国の批評家・小説家のフォースターに、次の言葉がある。

「民主主義には『万歳二唱』しよう。一つは、それが多様性というものを認めているから。二つ目には、それが批判を許しているからだ。この二つさえあればいい」

「民主主義とは何か」の答えは、これで十分ではないか。

社説：岐路の年に 格差と分断のない社会を

北海道新聞 2016年1月1日

「国のかたち」を問う1年の始まりである。

昨年は安倍晋三政権の強引さばかりが際立った。

集団的自衛権の行使容認を軸にした安全保障関連法は戦後、追い求めてきた「平和国家」という理想を根底から掘り崩しかねない。その危うさに多くの国民が声を上げたが、数の力で押し切った。

環太平洋連携協定（TPP）も同様だ。農業現場の不安を置き去りに突っ走った結果が、米国など11カ国との大筋合意である。

原発もしかり。福島事故はいまだ収束のめどが立っていない。それなのに、惨事を忘れたかのように再稼働へ突き進んでいる。

いずれも明日の生活に直結する問題だ。にもかかわらず、国民的議論を脇に置くやり方は、民主主義のまっとうな姿とは言えない。

今年夏には参院選がある。世論を顧みぬ権力の振る舞いを正し、進むべき方向を探る。主権者である私たちの責任である。

■まだ終わっていない

安保関連法の危険性はいまさら説くまでもない。対米追従をより強め、「殺し、殺される」状況にいつ巻き込まれるか分からない。

安全保障は国の根幹である。だからこそ、国会で長年にわたり議論を積み重ねてきた。それを力づくの議会運営で一方向的に覆す。その荒っぽい手法は、憲法が権力を縛る立憲主義をも踏みにじった。

一連の動きへの危機感の発露が国会を取り巻いた学生や若い母親も含む群衆だったといっている。

T P Pにしてもそう。貿易自由化の流れは避けられない。人口減で縮む国内の需要を海外に求める狙いもあるだろうが、論議が不十分なままではしこりが残り、産業の淘汰（とうた）も招きかねない。

安倍政権は安保法制はじめT P Pも原発も「既に決着済み」と、やり過ぎそうとしている。だが、すべてが終わったわけではない。

安保関連法では、どんな状況で自衛隊を海外に派遣し、どう部隊運用するか—などといった具体的な判断はこれからだ。

T P Pへの対策や、そもそも協定を承認するかどうかの議論も今年行われる。

原発も北海道電力の「泊」を含め大半が審査の途中である。

つまりは現在進行形なのだ。

夏の参院選は、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられて初めての国政選挙である。安保法制、T P P、原発について民意をしっかりと示す場としたい。

同時に社会全体で取り組まねばならないのは格差の是正である。

世界は今、新自由主義が生んだ弱肉強食型のグローバル経済にさらされ、格差が拡大。多様性を認める寛容さが失われつつある。

それが従来の国際秩序を突き崩し紛争や大量の難民流入、そしてテロの土壌となっている。

■「成長」頼みでいいか

日本も例外ではない。小泉純一郎政権以来、新自由主義がはびこり、給与など待遇が不安定な非正規が働く人全体の4割に達する。

所得格差は教育格差や地域格差につながり、社会を分断する。「溝」を埋める仕組みづくりが急務だ。

ところがどうだ。安倍首相が掲げるのは▼国内総生産（G D P）を600兆円に増やす▼希望出生率を1・8に上げる▼介護離職者をゼロに一などの政策だ。東京五輪が開かれる2020年以降を念頭に「新3本の矢」である。

急速に進む少子高齢化を考えれば、出生率や介護問題に注力することに異論はない。問題はそれらを経済成長の条件と位置づけていることだ。そして成長すれば、難題を克服できるとの論法である。

成長を下支えする人口の減少が続く。いつまでも、成長こそが豊かさや幸福を実現するというG D P信仰にすがり続けているのか。

■価値観を転換したい

豊かさを測る新たな物差しを考えたい。価値観の転換である。

心に響く言葉がある。2012年、ブラジルで開かれた国際会議でウルグアイのムヒカ前大統領が行った演説の一節だ。

「貧乏とは少ししか持っていないことではなく、限りなく多くを必要とし、もっとももっととほしがることだ」（汐文社「世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ」）

物欲まみれの心こそ貧困と断じ、成長や競争に血道を上げる世界への警鐘である。

もちろん競争や成長追求を一概に否定はしない。だが、行きすぎると息苦しさばかりが募る。

目指すは、若者もお年寄りも安心して暮らせる社会だ。そのためにはまず雇用環境を整え、それを支える福祉の安全網を拡充する。

その一方で、限りある資源を分かち合い、地産地消の視点を国全体に広げる循環型経済を構想してはどうか。食料基地・北海道を先駆けにしたい。

岐路の年だ。前へ踏み出そう。

家族2016 「ロボットは家族を、血縁を超えていく」 毎日新聞 2016年1月1日
「マツコロイド」開発、石黒浩教授インタビュー

タレントのマツコ・デラックスさんにそっくりのアンドロイド（人間型ロボット）「マツコロイド」を開発し、人と対話するロボットの研究に詳しい大阪大大学院基礎工学研究科・石黒浩教授に、「ロボットは家族になれるか」を尋ねました。石黒教授は「家族と聞けば多くの人は血縁を考えるが、ロボットは血縁を超えていく」と問題提起します。世界的に注目を集める、最先端のロボット研究者が考える「家族」とは――。【聞き手・鈴木敦子】

石黒浩・大阪大大学院教授＝鈴木敦子撮影

――将来、ロボットは家族になるのでしょうか？

◆そもそも家族の定義とは何でしょう。法律では決まっていますよね。誰もが納得する定義もないですよね。それだけあいまいなもの。例えば、「犬は家族になるのか？」「ペットは家族なのか？」と問えば、答えは人によって異なります。家族の認定は人間側がするだけで、世間が決めるものではない。だから、「ロボットは家族になるのか」という問いにも、答えがあるわけではない。仮にアンケートをとって、「イエス」と答える人がどれぐらいいれば、「ロボットは家族」と言えるのでしょうか。1億人のうち1人でも「イエス」と言えば、その人にとってロボットは家族になる。



考え方は人それぞれです。毎日使うペンや家にある大切なつぼを、自分にとっては家族だと思える人もいるかもしれない。物をどこまで擬人化できたら家族なのか。家族とは、その人がどう認定するかです。

――家族は絶対的な存在ではない、と。

◆「家族」という言葉は、人によって使い方も異なります。極端な例で言えば、弟が兄に「家族だから金を貸してくれ」と頼んだ時、兄は「お前なんてもう家族じゃない」と言うかもしれない。家族という言葉の持つイメージと、実態がかけ離れていることもあるのではないのでしょうか。

――では、ロボットに家族的な役割を求めるとしたら何が必要ですか？

◆まず前提として、ロボットの研究者は「家族（の一員）を作ろう」とは考えません。定義されていないような不確実なものは作れないので、「家族としてのロボットを開発しよう」なんて考え方はばかばかしいし、目標になりえません。どういう役に立つかを考えますね。そうすると、もっと機能を分解する必要があります。例えば「家族の役割とは何か」を「家族とは何をやる人なのか」に置き換えてみます。「10年一緒に過ごせるもの」とか「一人暮らしの人の対話相手」とか「学習支援ができるもの」などと、具体的な機能を決めて、ロボットをプログラムします。人によっては家族に家事をしてもらいたいかもしれない。床掃除に特化したものなら家電のロボットクリーナーがありますよね。

――話し相手もロボットが担うのですか。

◆単純なコミュニケーション機能を備えたものなら、既に開発を始めています。2種類の小型ロボット「コミュー」と「ソータ」がそう。対話できるロボットで、人間と一緒にゲームを楽しんだり、英会話などの学習の相手をしたり、といった使い方を想定しています。

いろいろと調べた結果、自閉症の子どもたちがロボットと相性が良いことが分かりました。人間が相手の時は抵抗を感じても、ロボットが相手なら積極的に対話することが多いのです。大人でも語学の習得に適しているのでは？ 人間を前にすれば、恥ずかしくて声に出せない人も、ロボットが先生になってくれれば、正しい発音ができるまで繰り返し練

習できるでしょう。

自閉症の子どもたちには実際に使ってもらっていて、対話や学習支援の分野でうまく使っています。大きさは高さが30センチぐらいで机にも載るサイズ。一人暮らしの人、お年寄りや子どもと一緒に過ごす相手としては、大きすぎず小さすぎず、これぐらいがいいのでは。もちろん役割に応じて、いろいろな大きさ、種類のロボットがいたらいいと思いますが。

—例えば、一緒にご飯を食べるロボットはどうでしょう。

◆一緒に食べる必要はありますか？ 食べるふりでもいいのでしょうか。誰かと一緒に食べたいのなら、隣にロボットを置いて、話しながら食べるだけでもよいのでは。海外で、アンドロイドを隣に置いて話しながら食べてもらったら、「楽しい」と言ってもらいました。食事の目的がコミュニケーションの場合、ロボットに求められるのは食べる行為そのものではなく、話し相手になることかもしれません。ちょっと愚痴を聞いてあげるとかね。

—「ドラえもん」のような、家族の一員としてのロボットは受け入れやすい？

◆受け入れやすいでしょうね。ドラえもんとは違いますが、誰かにそっくりなロボットよりも、特定の人間の個性を持たないロボットの方がよく受け入れられたりします。遠隔操作で対話ができる「テレノイド」がまさにそう。インターネット回線を使って、離れたところにいる人の話をテレノイドを通して言わせることができる。テレノイドは人の想像を引き出すロボットです。人間ではないが、かなり人間に近い。人は、声から想像した相手をテレノイドに投影できるんですよ。認知科学的な裏付けもあります。だからテレノイドは家族にもなりうる。実際に高齢者の心を満たしている。

認知症の高齢者にとっては、実際の人間よりもテレノイドを相手にした時の方が、はるかに話しやすいこともあります。「息子と直接顔を合わせて話すよりも、テレノイドを通して息子と話す方がいい」。そんな感想もありました。いろいろと気を使ってしまう息子に話をするよりも、自分の想像で話せるロボットの方が話しやすいのだと思います。

—家族の関係にも一石を投じるかも。

◆ロボットという存在は自由度を広げてくれます。生活にロボットが入ってくことで、もっと柔軟にいろいろな人のつながりを作れると思います。どういうことかと言うと、家族と聞けば多くの人は血縁だと考える。でも、ロボットは血縁を超えていく。ロボットが加わることで、血縁や家族という単位だけに縛られる必要がなくなると思います。

家族という縛りは、時に不平等を生み出す仕組みになる。例えば、親の介護のために仕事を辞めてその後の人生設計が狂ってしまうとか、親が大金持ちだから一生働かずに遊んで暮らせるとか、こういうことは果たして公平な状態でしょうか。家族を重視するということは、ネガティブに捉えれば、「他人の家族は知りません」ということ。社会が進化し、家族の形態も変化しました。今は多様化が進んで、旧来の家族を大事にしたい人も、その逆の人も、どちらも認められるようにしようという時代。家族がいてもいなくても、回っていく仕組みが求められている。ロボットがそれを可能にしてくれる。

—家庭内での問題にロボットが介入すると、解決方法も変わるかもしれませんね。

◆家族を自分の道具や所有物だと思っている人もいますからね。特に子どもに対しては。例えば、子どもを虐待する親がいて、お父さんが子どもを殴ったら、ロボットが来てお父さんを羽交い締めにして、子どもに虐待してはいけないと教育するとかね。そういう使い方がいいかどうかは分かりませんが。ロボットが家族の関係性を変えていく可能性は十分あるでしょうね。

そうすると、ロボットが家族を超えてしまうのではないか、そもそも人間の存在価値がなくなってしまうのではないか、と考える人もいます。でも、ロボットと人間は対立するものではないのです。テレノイドが示すように、家族や人間の存在を強く意識するものとして、ロボットが役に立っていることもあるのです。

連載への感想や体験談を募集

連載への感想や、家族関係・ひとり世帯の体験談などをお寄せください。郵便は〒10

0-8051 (住所不要) 毎日新聞生活報道部「家族2016」係へ。メールは表題を「家族2016」として、kurashi@mainichi.co.jp、ファクスは03・3212・0256へ。

ハートフルアグリテーマ 1月30日シンポ 大阪日日新聞 2015年12月31日
障害者の雇用や就労による農業「ハートフルアグリ」をテーマにした「ハートフルアグリシンポジウム in おおさか」(大阪府主催)が来年1月30日、大阪市北区の国際会議場で開かれる。午後1時~同5時半。申し込み締め切りは1月25日。

府みどり公社のコーディネーターなど3氏が、ハートフルアグリなどに関する先進事例を紹介する。

また、農地取得や農産物の販路拡大、人材育成などの課題をめぐり、福祉関係者などによるパネルディスカッションを行うほか、交流会を行う。女優で戸板女子短期大客員教授の菊池桃子さんの基調講演も行われる。入場無料。

問い合わせは電話06(6633)9493。

個人番号カード 来月中旬から交付 NHK ニュース 2015年12月31日
マイナンバー制度は、来月から運用が本格的にスタートし、顔写真の入ったICカード「個人番号カード」の希望者への交付が始まりますが、各自治体では、年内に配りきれなかった「通知カード」の再配布の手配も重なることから、混乱なく制度をスタートできるかが当面の課題です。

マイナンバー制度は、番号を伝える「通知カード」の初回の送付が年内でほぼ終わり、今後、希望者に対し、公的な個人証明書として使える顔写真の入ったICカード「個人番号カード」が無料で交付され、運用が本格的に始まります。

総務省によりますと、今月20日時点でおよそ230万枚分の申請があり、早い自治体では、来月中旬から、個人番号カードを自治体の窓口で受け取れるようになる見通しですが、交付を受ける人が集中することも予想されるため、自治体によっては、交付時期を申請者ごとにずらしたり、臨時的窓口を設置したりするなどの対策を取ることになっています。

一方、転居などで初回の送付ができず、自治体に戻された通知カードは、今月27日時点で、全世帯のおよそ10%に当たる558万通に上っています。このため、各自治体は今後、個人番号カードの交付作業と、通知カードの再配布の手配を並行して行う必要があります。混乱なく制度をスタートできるかが当面の課題です。

マイナンバー あす運用開始 番号通知は未完了 安全対策も未確立

しんぶん赤旗 2015年12月31日

「マイナンバーはいらない」とデモ行進する市民ら=10月3日、

東京都渋谷区
各世帯に配られている
マイナンバーの通知カード



安倍内閣は、日本に住民票を持つ一人ひとりに12桁の番号を付けて管理する共通番号(マイナンバー)制度の運用を来年1月から始めようとしています。番号制は、政府が個人情報をも一つの番号で管理し、税・保険料の徴収



強化や社会保障の抑制をすすめるために使うもの。現状では運用開始の条件などまったくないのが実態です。

日本郵政は17日、個人番号を記載した「通知カード」の「初回配達」が、印刷漏れなどがあつた一部を除いて完了したと発表しました。しかし、郵便局が配達を引き受けた約5684万通のうち、24日時点で住民の手元に渡ったのは約5126万通に過ぎず、受取人不在などで市区町村に戻された「通知カード」は約558万通。1割近くにも及んでいます。

政府は、税や社会保障などのさまざまな手続きで個人番号を記入させる予定ですが、番号の通知という前提が崩れています。

4割未着手

重大なのは、安全対策が未確立なことです。

マイナンバー制度の運用を監視するために1月から発足する「個人情報保護委員会」は、安倍政権が臨時国会を開かなかった影響で国会同意人事の議決が年内に得られず、欠員を抱えたままのスタートとなります。地方自治体の対策も2016年度予算案でも対策費を盛り込むなどまだこれからです。

大半の民間企業でも対応が遅れています。日本商工会議所が11月30日に発表したマイナンバーへの対応をたずねた調査によると、「(対応が) ほぼ完了している」と答えた企業は、わずか13・9%。一方、「対応する内容は分かっているが、準備にはまだ着手できていない」が21・8%、「具体的に何をすべきか分からない」が19・5%、合わせて41・3%の企業が対応に“着手していない”状態でした。

新たな問題

新たな問題点も次々浮上しています。

1月から、申請した希望者には、顔写真付き、ICチップ搭載の「個人番号カード」の交付が始まります。そのさい、役所での交付時の本人確認に「顔認証システム」が導入されます。新たな人権侵害やトラブルを引き起こすものです。

「個人番号カード」は当面、身分証明書ぐらいにしか使えません。しかし、政府は15年度予算、同補正予算案、16年度予算案で合計3000万枚分もの発行費を計上。「メリット」だけを大げさに宣伝して取得を促しています。普及とともにさまざまな機能や個人情報をカードに追加していくことをねらっています。しかし、個人情報蓄積すればするほど、漏えいしたときの被害も深刻になります。矛盾は避けられません。

申請での番号記載をめぐる問題では、介護保険に関して番号の記載がなくても申請書類は受理され、サービスを受けられることを明記した通知が15日に厚生労働省から出されました。強制しようとするほど問題点が発生し、矛盾が生じています。1月からの運用は中止し、危険な共通番号制度は撤回するしかありません。

【産経抄】365日の区切りの「ひと休み」元旦に抱く感慨 産経新聞 2015年1月1日

明けましておめでとうございます。それにしても、お正月には、どんな意味があるのだろうか。作家の井上靖さんは、「元旦に」という詩に書いている。▼「人間の一生が少々長すぎるので、神さまが、それを、三百六十五日ずつに区切ったのだ。そして、その区切り、区切りの階段で、人間がひと休みするということだ」。昭和32年の元旦、50歳を間近にした井上さんが抱いた感慨だった。▼「ひと休み」の1日、井上家には大勢の客が訪れて、酒宴となるのがならわしである。ある年の宴（うたげ）が終わり、最後の客を玄関で見送った後のことだ。何かの拍子に笑い始めた、4人の子供たちをひどく叱った。▼「敷地を出るまで決して笑うな。客は自分のことを笑われたと思うから。ひょっとしたら、井上の家を恨むこともあるかもしれない。笑われる立場にない人は、自分が笑われたと思わない。しかし、世の中にはそうではない人もおり、邪気のない笑いが人を傷つけることがある」。ドイツ文学者の長男、修一さんが小紙に語ったエピソードである。▼「文壇の紳士」と呼ばれた井上さんの気配りは、毎年秋の一夜にも発揮された。ノーベル文学賞の有力候補とあって、自宅前には大勢の報道陣が陣取った。「落選」が伝えられると、井上さんは外へ出

てくる。「力及ばず、申し訳ありません」。元新聞記者の井上さんは“門前会見”で、ユーモアをまじえて「おわび」を繰り返すのだった。その後は、駆けつけた友人たちと記者を招き入れ、残念会の宴が深夜まで続いたという。▼井上さんは果たせなかったが、今年も、日本人のノーベル賞受賞ラッシュを期待したい。もちろん、そんな初夢には、村上春樹さんの文学賞受賞も含まれている。

余録 元禄3（1690）年の芭蕉の歳旦吟（新春詠）に... 毎日新聞 2016年1月1日

元禄3（1690）年の芭（ば）蕉（しょう）の歳旦吟（さいたんぎん）（新春詠）に「薦（こも）を着て誰人います花の春」がある。新春の華やぐ街で粗末な薦をかぶった乞食（こつじき）を見かけた。どなたなのか、もしや尊い聖（ひじり）ではあるまいか▲この句は京の俳人の間で、新春詠の巻頭に乞食をもってくるとは何事かと物議をかもしたという。芭蕉はこれに対し、情けないことだと嘆き、京に俳人はもういないと憤慨した。西（さい）行（ぎょう）法師作とされた説話集に出てくる高德の乞食僧にかねて心を寄せていた芭蕉だった▲芭蕉自身も当時は「こもかぶるべき心がけ」で俳句にのぞんでいたという。富や力が支配する世を捨て去り、目に見えない高みをめざす生き方は芭蕉その人が求めるところだったのだろう。俗世でさげすまれる姿や形は、むしろ高い徳、聖なる力のあかしなのだった▲みすばらしい放浪の旅人が実は神や仏の化身（けしん）だったといった話は世界中の人々が好んで語り伝えてきた。貧しい者、虐げられた者こそが神に愛されるという宗教的感情も広く行き渡っている。富や力では得られぬ魂の救済への渴望（かつぼう）や聖なるものへの畏（おそ）れは誰にもある▲だがグローバル経済がむしろ人々の間に心の壁を作り出し、歯止めなき暴力が噴き出る今日の世界である。文化を異にする人々が共に生きる制度や理念が崩れていく不安の中で新しい年を迎えた。異質な他者への嫌悪が幅をきかせ、貧者や虐げられた人への共感もやせ細っていくように見えるのは杞憂（きゆう）だろうか▲芭蕉の見た乞食は新春をもたらした年神の化身かもしれない。この世の壁を超える聖なるものへの感覚をどうかよみがえらせてほしい2016年の年神だ。

春秋

日本経済新聞 2016年1月1日

「何となく、／今年はいい事あるごとし。／元日の朝、晴れて風無し」。新春のおだやかな空に、石川啄木のこの歌はよく似合う。借金と病気に苦しんだ啄木だが、それだけに新しい年への思いも強かったのだろう。ほかにも「悲しき玩具」に正月の歌はいくつかある。▼たとえば「年明けてゆるめる心！／うつとりと／来し方をすべて忘れしごとし」。元旦を迎えれば気分一新、いやなことも消し飛んでいくというのだ。なれば朝酒など口にして眠くなり「腹の底より欠伸（あくび）もよほし／ながながと欠伸してみぬ、／今年の元日」。心はいよいよゆったりと、そしてしばし夢を見たかもしれない。

▼啄木が新年にこうも希望を寄せたのは、明治末という時代ゆえでもあろう。駆け足で近代化を達成した日本はロシアとの戦争にも勝って列強の仲間入りをする。けれど次の時代が見えない。政府は大逆事件で社会運動を封じて体制維持に躍起となる。自我に目覚めた青年に出口がない……。啄木の言う「時代閉塞」である。

▼そんな状況を現代になぞらえる声は昔からあったし、いささか安易だ。とはいえ世の閉塞感は昨今もなかなか強いから、正月くらいは啄木にならって「今年はいい事あるごとし」と希望を持つとしよう。この明治の異才は時代閉塞を唱えつつこんな詩も残している。「見よ、今日も、かの蒼空（あをぞら）に／飛行機の高く飛べるを。」



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行